富士登山者が期待する公園の資源と利用のイメージに関する研究

Image of Park Resources and Use Expected by Climbers at Mt. Fuji

山本 清龍*

Kiyotatsu YAMAMOTO

Abstract : Recently, many environmental education programs are being held in natural parks in Japan. Attractiveness and value of parks are brought to users through guidance of interpreter and information boards. But, there is enough ground for controversy of what and how to bring to users. In order to protect both park resources and visitors experience, it is very important to deal with information on not only the ecosystem but also the ideal use which park stakeholders desire. Hence, this article handles image of park. The purpose of this study is 1) to grasp the image of park resources and use which users has as expectation, and 2) to discuss roles of image. The field of this study is Mt. Fuji, a symbol of Japan and questionnaire survey is employed as a method. As a result, presence or absence of image affected environmental friendly consciousness, awareness of the problems of Mt. Fuji, support to management action and opinion about World Heritage issue. In addition to that, it was thought that image could be useful to argue about ideal park management and planning and to put argument into shape.

Keywords: *image, resource, use, climber, Mt. Fuji*

キーワード: イメージ, 資源, 利用, 登山者, 富士山

1. 研究の背景と目的

近年では、中部山岳国立公園上高地におけるパークボランティア¹⁾や尾瀬国立公園における尾瀬自然解説ガイド²⁾のように、行政や地域の公園管理団体が主導しガイドによって自然解説を実践する例が多く見られるようになり、自然公園を拠点とした環境教育の事例が増えつつある。しかし、公園の管理者やそれに深く関わる組織が訪れる人に何を伝えるのか、どのように伝えるのかなどの重要な論点に関し十分に議論が尽くされているとは言い難い。というのも、動植物などの自然資源については関心や知識、体験を提供するための様々な取り組みが行われているものの、公園の管理方針や計画の根底にある一貫した考え方について理解を得るような取り組みは少なく、したがって公園のあり方や目指すべき公園像について話題を提供する機会も少ない。もちろん、管理の方針や計画概念について関心を持つ利用者が多くないということも考えられるが、施策の変更や導入、廃止が来訪者を含めた公園の利害関係者に重大な影響を及ぼすことを考慮すれば、政策に対する理解と支持を得るための方策の一つとして環境教育の方法論について検討しておくことが望まれる。例えば、一つの自然公園であっても自然資源や文化資源など複合的に資源を持つことから、公園あるいはその一部をどのように位置づけて管理していくのか、どのような行動へと誘導していくのか、その目指す公園像を決定しておくことが必要である。また、さらに言えば、その理想的な公園像としてのイメージを決定しておくだけでは不十分であり、利用者を含めた公園関係者に伝え共有することではじめて自然と人あるいは対人関係における軋轢を軽減し、持続可能な公園利用の方向性を見出せると考えられる。

以上のような視点に立脚した上で、自然公園法第一条³⁾にもあるように、資源と利用の質はともに保護すべき対象であり、公園の管理計画にとって最上位の概念であることから、本研究では、利用者が期待する像を捉えるために自然公園の資源イメージと利用イメージの両者を把握し、その役割について論じることとした。

なお、本研究ではイメージを、経験あるいは想像によって形成される心象であり、期待や理想を含む包括的な概念として取り扱う。既往研究では、イメージは視覚像や単純な記憶像と区別された上で行動に影響を及ぼすこと^{4), 5)}が知られている。また、観光行動はイメージが強い力を持つ領域⁶⁾として考えられていることなどイメージを扱った研究成果は心理学の分野を中心にかなりの蓄積がある。しかし、管理計画の観点から自然公園のイメージを扱ったものはきわめて少ない⁷⁾。

2. 研究方法

(1) 研究対象地

研究対象地は近代日本の象徴であり、国立公園制度の発展初期段階において重要な役割を果たした富士山とした。これまで、美化清掃運動の展開に見られるように、ゴミや尿尿など特に生態系に与える影響の問題がこれまで強調されてきた^{8), 9)}。また、毎年20万人以上の登山者があり、その利用の集中が及ぼす心理的な負の影響についても指摘¹⁰⁾されている。さらに、現在富士山では文化的景観を保存するための世界遺産登録の取り組みが始まっており国民的関心の高い自然公園と言えるが、一方で、利用者数の増加など公園を取り巻く社会環境の変化によって公園資源に大きく影響が及ぶことが懸念されており、モニタリングの必要性が高い公園といえる。

(2) 調査手法

富士山における登山者の意識を把握するため、2007年8月8日から19日までの平日3日（水・木・金）および週末1日（日曜日）の計4日、富士山五合目泉ガ滝付近の登山道分岐地点において、頂上到達後の下山者を無作為に抽出し、調査への協力依頼に対して同意を得られた18歳以上の者に対して面接式のアンケート調査を実施した。

(3) 調査票の構成

調査票には年齢や性別、住所の基本属性のほか、交通手段や登

*東京大学大学院農学生命科学研究科

表－１ 富士登山者の基本属性と利用特性、意識

項目	人	割合	項目	人	割合	項目	人	割合				
年齢	10代	24	4%	グループ 人数	1人	48	7%	資源イメージ と 利用イメージ	価値の高い自然がある	331	49%	
	20代	341	51%		2人	173	26%		自然遺産というよりも文化遺産である	168	25%	
	30代	123	18%		3～5人	233	35%		人間からの影響を受けやすい自然がある	369	55%	
	40代	70	10%		6～9人	101	15%		自然破壊は深刻だ	419	63%	
	50代	44	7%		10～19人	48	7%		いつでも気軽に登れる山であってほしい	270	40%	
	60代	55	8%		20人以上	58	9%		誰もが登れる山であってほしい	325	49%	
	70代	7	1%		夫婦	38	6%		自然破壊の責任は登山者にある	354	53%	
性	男	373	56%	グループ 構成	家族	94	14%	環境配慮意識	自然破壊の責任は自分自身にある	168	25%	
	女	295	44%		カップル	37	6%		ゴミを持ち帰ること	466	70%	
住所	北海道・東北	20	3%		友人	271	40%		ゴミを拾うこと	40	6%	
	関東	488	73%		同僚	107	16%		動植物の保護	43	6%	
	北陸・甲信越	48	7%	登山日程	1日(日帰り)	70	10%		道から外れないこと	21	3%	
	東海	60	9%		2日(宿泊なし)	188	28%		節水	15	2%	
	近畿	38	6%		2日(山小屋泊)	387	58%		無回答	142	21%	
	中四国・九州	16	2%		3日(山小屋泊)	21	3%	富士山の問題 に対する認識	ゴミ問題	527	79%	
交通手段	マイカー	223	33%	普段よく する自然 体験活動	ドライブ	278	41%		尿尿問題	336	50%	
	公共交通	136	20%		散歩	252	38%		自然体験の劣化	308	46%	
	ツアーバス	324	48%		バーベキュー・オートキャンプ	208	31%		マナーの低下	262	39%	
登頂回数	初めて	478	71%		登山・ハイキング	201	30%		利用施設の快適性低下	159	24%	
	2～3回目	131	20%		スキー	187	28%		情報や施設の不足	124	19%	
	4～9回目	43	6%		水泳などの川や海、湖での遊び	127	19%		過剰整備	80	12%	
	10回以上	15	2%		野鳥や野草などの自然観察	58	9%	ゴミ拾いなどの美化清掃活動	418	62%		
注1) 有効回答数＝670			注2) 各項目の合計数と有効回答数の差は無回答									
注3) 交通手段、グループ構成、普段よくする自然体験活動、資源イメージと利用イメージ、富士山の問題(最大3つまで)、支持する管理施策(最大5つまで)は複数選択可												
注4) 環境配慮意識は自由記述によって回答されるものであり意味内容を分類し項目化した												
頂回数、グループの人数と構成、登山日程、普段よくする自然体験活動 ¹⁾ など利用特性を把握する項目を設けた。その上で、富士山の資源イメージと利用イメージに関する質問項目を設け、登山者の意識を把握できるように設計した。そのほか、「登山中に、自然環境に影響を与えないよう気をつけたことはありますか?」という問いによる環境配慮意識(自由回答)、富士山の問題、富士山をよくするための管理施策、世界遺産登録への賛否とその理由(自由回答)についても質問を設け、イメージとの関わりがあ												

見、登山意向との関係性を把握するため、同様にクロス集計とカイ2乗検定を行い、そのクロス集計結果の分布と検定結果をあわせみること、その連関を正と負に区別して把握し一覧として整理した（表-2）。

（i）環境配慮意識との関係性

資源イメージと利用イメージの両者を比較すると、多くの資源イメージと環境配慮意識の間に正の連関があり、公園の資源価値のイメージが動植物の保護意識や道から外れないという行動規範意識へとつながっていることが分かる。また、自然破壊は深刻だ、影響を受けやすい自然があるという公園資源の特徴に関するイメージはゴミの持ち帰り、動植物の保護といった環境配慮意識とのつながりがみられた。一方、利用イメージにおいては、いつでも、誰でも登れる山というイメージと環境配慮意識の間に負の連関が見られた。以上から、公園利用者に環境配慮意識を持ってもらうためには利用イメージよりも資源イメージの方が相対的に重要であること、公園に対するイメージによって持たれる環境配慮意識が異なることが考えられた。

（ii）富士山の問題の認識との関係性

大きく、資源イメージと利用イメージを比較すると、今度は反対に利用イメージの方が富士山の問題の認識との連関が多くみられた。まず、資源イメージと富士山の問題に対する意識との関係では、自然破壊が深刻であるというイメージとゴミ問題の意識の間に正の連関、公園の資源価値のイメージと自然体験の劣化の問題意識の間に負の連関があった。一方、利用イメージにおいては多くの連関が見られ、誰もが登れる山というイメージが利用施設の快適性が低下しているという問題意識と正の連関を持ち、過剰整備の意識とは負の連関があった。また、責任が登山者にあるという公園利用の特徴に関わるイメージはゴミやマナー低下の問題に対する認識と連関がみられた。以上から、富士山の問題に対する意識を高めるためには、資源イメージよりも利用イメージの方が相対的により効果的に働きかける可能性があること、イメージによって問題の認識のされ方が異なることが明らかになった。

（iii）支持する管理施策との関係性

富士山が持つ資源の価値がイメージされたとしても、わずかに文化的資源としてのイメージとトイレの増設に対する支持の間に弱い（ $P < .05$ ）連関があるのみで、管理施策との連関はあまり見られなかった。一方、公園資源の特徴に関するイメージからは、美化清掃活動やマイカー規制の延長、マナーの指導と利用法の案内など多くの管理施策と正の連関があった。利用イメージでは、公園の利用価値のイメージとトイレの増設、トイレや休憩所を清

表-2 イメージと属性、利用特性、意識との連関表

			イメージ	資源				利用			
				価値の高い自然がある	自然遺産というよりも文化遺産である	人間からの影響を受けやすい自然がある	自然破壊は深刻だ	いつでも気軽に登れる山であってほしい	誰もが登れる山であってほしい	自然破壊の責任は登山者にある	自然破壊の責任は自分自身にある
基本属性、利用特性、意識			N	331	168	369	419	270	325	354	168
基本属性	年齢	20代	341								
		30代	123								
		60代	55								
		性	女	295							
利用特性	登頂	2～3回	131								
	人数	1人	48								
		20人以上	58								
	普段よくする自然体験活動	散歩 登山・ハイキング マウンテンバイク・カヌー	252 201 27								
環境配慮意識	環境配慮意識	ゴミを持ち帰ること	466								
		ゴミを拾うこと	40								
		動植物の保護	43								
		道から外れないこと	21								
		無回答	142								
富士山の問題	富士山の問題	ゴミ問題	527								
		尿尿問題	336								
		混雑など自然体験の劣化	308								
		マナーの低下	262								
		利用施設の快適性低下	159								
		情報や施設の不足	124								
		過剰整備	80								
意識	支持する管理施策	ゴミ拾いなどの美化清掃活動	418								
		トイレの増設	176								
		環境にやさしいトイレの開発と設置	320								
		マイカー規制の延長	135								
		登山者数の制限（入山規制）	164								
		ガイド（有料）による案内を義務化	47								
		入山料（大人2千円・子供半額）を徴収	114								
		登山者へのマナーの指導、利用法の案内	232								
		登山道の整備	174								
		過剰な施設整備を見直す	50								
世界遺産登録への賛否	賛成 反対 どちらでもない	賛成	437								
		反対	40								
		どちらでもない	186								
賛否の理由	賛否の理由	無回答	246								
		世界遺産として適格であるため賛成	303								
		条件つきではあるが賛成	27								
		規制に反対であるため反対	11								
		問題があるため反対	25								
登山意向	必ず登りたい 機会があれば登りたい あまり登りたくない 絶対登りたくない	必ず登りたい	121								
		機会があれば登りたい	315								
		あまり登りたくない	171								
		絶対登りたくない	36								

注) ++, ---: $p < .01$ +, -: $p < .05$ (Fisher's exact test)

(有効回答数=670)

+, ++: 正の連関 - , --: 負の連関 (クロス集計結果の分布により判定)

■: 1%で有意なもの (基本属性および利用特性については1%で有意なもののみ示した)

世界遺産登録への賛否の理由は、自由記述の意味内容を分類して項目化した

潔に管理する施策との間に正の連関があり、登山者数の制限との間には負の連関があることから、いつでも、誰でも登れる山であってほしいというイメージは入山規制に関する施策を敬遠し、施設の整備水準を高く要求する可能性が示唆された。また、自然破壊の責任が登山者、自分自身にあるといた公園利用の特徴のイメージは、ガイドによる案内を義務化する施策やマナーの指導、利用法の案内の施策との間に正の連関があった。以上、連関の有無の観点からみれば、管理施策に対する理解、支持を得るためには、公園の資源価値イメージよりも公園の利用価値や資源、利用の特

徴のイメージを伝えることが重要と考えられた。

(iv) 世界遺産登録に対する意見との関係性

現在、富士山では世界遺産登録にむけた取り組みが始まっており、来訪者の登山環境に大きな変化が生じる可能性がある。そこで、イメージと世界遺産登録への賛否との関係性、賛否の理由との関係性について把握を行った。その結果、公園の資源価値のイメージや公園資源の特徴のイメージ、公園の利用価値のイメージと登録への賛成意見との間に正の連関が見られた。また、理由をみると、富士山が世界遺産として適格であることによって賛成されていることが明らかとなった。一方、自然破壊が深刻であるという公園資源の特徴のイメージと条件付きでの賛成意見との間に正の連関が見られ、公園資源に対する危機感から無条件では賛成できなくなっていると考えられた。

(v) 登山意向との関係性

富士山の資源と利用のイメージと、もう一度富士山に登りたいか否かという今後の登山意向との間には顕著な連関は見られず、それほど強くない連関 ($P < .05$) がいくつか見られた。たとえば、公園の価値イメージは肯定的な登山意向へとつながっているのに対し、自然破壊の責任帰属イメージは否定的な登山意向へとつながっていた。

4. 考察

本研究では、富士登山者が期待する公園の資源と利用のイメージを把握し、公園に対するイメージによって、登山者が持つ環境配慮意識や富士山の問題に対する認識、管理施策への支持、世界遺産登録に対する賛否が異なることを明らかにした。一連の研究結果から、いくつかの課題や問題点を指摘できる。まず、富士山においては初めての登山者が圧倒的多数を占めており、1回限りの公園利用者の意識にいかに関わることができるのか大きな課題といえる。また、登山者のうち若年層では富士山が持つ自然の価値のイメージが少なく効果的な情報提供の方法についても検討する必要がある。さらに、普段に登山やハイキングをよくする公園利用者では、誰もが登れる富士山であってほしいとは思っておらず、施策として団体登山者の数の規制を支持している ($p < .01$) ことから、何の制限もなく登山者を受け入れている富士山の現状では、こうした経験の豊かな登山者の期待を阻害している可能性を否定できず検討の余地がある。以上が本研究の結果の整理であるが、最後にここで、環境教育および自然公園の管理計画の観点から、①利用者が環境配慮意識を持つためのイメージの活用、②イメージの役割と可能性の二点について考察する。

(1) 利用者が環境配慮意識を持つためのイメージの活用

自然公園において資源の保護を図りながら利用を促進していくための一つの方法として、一人一人の利用者が環境配慮意識を持ち行動していくことが有効である。既往の研究結果からも公園利用者が環境配慮意識を持つためには、環境リスクや責任帰属の認知に加えて自然の価値や性質についても認知することが重要である¹²⁾。本研究では、イメージとして扱った8項目の中に両者が含まれるよう設計したが、特に、資源の価値や特徴に関するイメージを持つ登山者には環境配慮意識も多くみられた。一方、いつでも気軽に、誰もが登れる山といった公園の利用価値に関わるイメージが強い登山者では、環境配慮意識や過剰整備に関する問題意識が少なくなり、トイレや休憩所に対する要求水準が高くなっていた。確かに、現在の富士山は昼夜関係なく登ることができ、誰一人制限されることなく登ることのできる山となっており広く国民的に利用されている公園である。しかも、いつでも気軽に、誰もが登れる山であってほしいと期待する登山者は決して少なくなく、登山者の要求に応じていこうとすると施設の整備水準を上げざる

をえない状況である。それゆえ、富士山の今後の管理計画を考えると、どこまで施設整備をするのか明確な基準が必要であり、本研究で取り扱ったようなイメージを情報共有とコンセンサスづくりにむけて活用していくことがのぞまれる。

(2) イメージの役割と可能性

言うまでもなく、本研究で用いた8つのイメージはア・プリオリに決定される項目ではなく、公園の特性を大きく「資源」と「利用」に区分して、地域の事情を考慮しつつ決定したものである。それゆえ、多分に提案的であることを否定しないが、自然公園の管理計画や今後のあり方など、方向性を検討する際には十分に議論の題材として用いることが可能である。自然公園法の改正によって利用調整地区を設定することがすでにできるが、イメージを用いることで細かいデザインではなくいつでも誰もが登れる山として維持することの是非など管理計画の根底に通ずる大きいくりの議論ができ、無制限な利用を許容していく上での課題や問題点を整理できる。現在、富士山では世界遺産登録にむけた取り組みが活発であるが、公園資源と利用体験の両者の保護を目標として掲げる自然公園の維持、管理にむけては、公園の理想像に関わる議論が必要であると問題提起しておきたい。なお、公園の理想像をどのような利害関係者が参加して議論し描いていくのか、共有された像をどのような過程で具体的な施策に反映させていけるかなど多くの課題が残るが、今後の研究課題としたい。

補注および引用・参考文献

- 1) 環境省 (2008.5.12) : <http://www.env.go.jp/park/chubu/>
- 2) 尾瀬保護財団 (2008.5.12) : <http://www.oze-fnd.or.jp/>
- 3) 自然公園法第一条では「この法律は、優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図り、もつて国民の保健、休養及び教化に資することを目的とする。」と定められている。その他、米国の国立公園では利用体験と資源の保護 (VERP: Visitor Experience and Resource Protection) という二つの目標を定めている。
- 4) 河合準雄 (1977) : 無意識の構造 : 中央公論社, 35-46
- 5) K・E・ボウルディング (1962) : ザ・イメージ : 誠信書房, 222pp
- 6) 前田勇 (1995) : 観光とサービスの心理学 : 学文社, 97-122
- 7) 他の視点を持つ知見として、経済評価の観点から釧路湿原のイメージが扱われた 栗山浩一 (1998) : 環境の価値と評価手法 - CVMによる経済評価 : 北海道大学図書刊行会, 279pp や、自然に対する態度の経年変化の観点から 藤原武弘編 (1997) : 社会心理学 : 培風館, 123-132 などがあり本研究を企画する上で参考にした。
- 8) 環境庁 (1993) : 富士山地域快適利用対策調査報告書, 73pp
- 9) 自然環境研究センター (2000) : 平成11年度富士箱根伊豆国立公園富士山地域環境保全対策促進調査報告書, 67pp
- 10) 山本清龍 (2005) : 富士山および尾瀬ヶ原における自然公園利用者の属性と意識の差異 : ランドスケープ研究 68(5), 733-736
- 11) 以下の文献を参考にした。海津ゆりえ・宮川浩・真板昭夫・上杉哲朗 (1997) : 子供・親子・高齢者の身近な自然とのふれあい活動に関する研究 : ランドスケープ研究 60(5), 647-652
- 12) 山本清龍・本郷哲郎 (2006) : 青木ヶ原樹海の利用者が持つ自然公園イメージと環境配慮意識の関係性に関する研究 : 環境情報科学論文集 20, 153-158